



海外出張の思い出（帰国に向けて⑪）

高島 敬明

色々なことがありましたが、仕事は順調に進みました。「寒くなる前に計画を変更して帰国できるようにします。」とのプロマネの話がアッという間に広がりました。ソ連の技術でできる仕事はソ連にお願いして、多くの人々が帰国することになりました。赤字現場であるので少しでも費用削減の考えがあったものと思います。

私の会社でも私を入れて3名を残してあとは帰国することが決まりました。皆大喜びでしたが、9月号に書きましたように流量計のトラックからの落下事故で本体は現地では調整できないとの結論が出て、結局日本に送り返して調整後再度送られて来ることになりました。黒海からトルコのイスタンブールを経て地中海に入り、スエズ運河を通りインド洋、インドネシアのマラッカ海峡、南シナ海を廻る遠い遠い航海です。往復で3か月から6か月かかるだろうと言われました。従って帰国は早くて翌年の2月後半、遅ければ4月頃になるのです。落下事故さえ無ければと嘆息したものです。その間電気計装の仕事しかなく、寒い中細々とそのお手伝いしかないので。あらかた工事は終わっていましたので、強制送還されてもいいかと規則に目をつむって作業員に誘われるままに送別会だとか何とか言って、街の2軒しかないレストランに連れていかれ飲み会をするようになりました。私は責任者なので外出は規則でほぼ禁止されていましたが・・・

作業員はしょっちゅう行っているのでレストランでは顔でフリーパスです。たくさんのお客に混じって日本人もソ連人も何かにつかれたように、生バンドに合わせ思い思いに体を動して踊っていました。お客は若い女性がなぜか多く、後で分かったことですが、多くは例の6000人の看護婦学校の生徒だということでした。飲んで席に話しかけて来る女性もいて、その時は何となく危険(?)を感じたので早めに退散しました。

2月に入り、待ちに待った「流量計」が到着しました。しかし冬の海は荒れて仕事になりません。

作業が完全に終わったのは3月後半だったと記憶しています。帰国する日が次第に近づいて来ました。この頃フルシチョフの力も弱まったのか政情不安が続き、モスクワでは時々共産党の大きな集会があるようになって航空券が取れなくなることがありました。帰国が2000キロ余りの列車の旅になるかも知れないとの話もあり、皆色めき立ちました。私は、一週間の汽車の旅を望んでいましたが他の人は反対でした。列車を実際に見てきましたが、仕組みがよく分かりません。幅も広く中は綺麗な車両でしたが、結局航空券が取れ飛行機になってしまいました。私としてはまたとないソ連国内の一週間の寝台列車の旅のチャンスでしたが、非常に残念に思いました。

いよいよ帰国が近づいて我々の間ではお土産の事だとか、何かと大騒ぎしていましたから当然寺島さんも知っていたわけですが、通常の会話の中ではお互いそのことには触れることは有りませんでした。帰国する日の2週間位前だったと思います。航空券も手配され周りが慌ただしくなった中で、いつもの「夜のミーティング」で寺島さんに、帰国が決まったこと、大変お世話になった感謝の気持ち、寺島さんが元気で過ごされますよう、などを酒に任せて努めて明るく伝えました。これに対して寺島さんは、「そうですか！ それはよかった。これから日本を背負っていかれる人達だから体に気を付けて頑張ってください」と気落ちした様子もなく私の手を両手で握って、いつまでも放しませんでした。時には寺島のことも思い出してください、と言ったと思います。夜も更けてお開きになるころ、寺島さんから「高島さん、今度の土、日は休ませていただきます」と話しかけられました。土曜日の早朝一人でせかせかと出ていかれました。

日曜日の夕食前に、疲れた風でもなく元気に帰って私の部屋に挨拶に見えました。夕食もそこそこに班長他2名と寺島さん、4～5名入れ替わりながら恒例の「夜のミーティング」が始まりました。

た。酔うほどに夜も更けてきて皆は部屋に引き上げていき寺島さんと2人になりました。寺島さんは一度部屋に戻り、何か粗末な紙に包まれたものを持って来られました。そして「高島さん、本当にお世話になりました。昨日家に帰りこんなものを持って参りました。」と言われるのです。土日のお休みにノボロシースクからご自宅のあるトアプセまで長時間バスに揺られながら、何も話さないでこの品物を取りに帰っていたのです。中から直径30cmほどのレコード盤3枚、箱に入ったジョ二黒のウイスキー、それに手紙を出されました。寺島さんは、「レコードは<カチューシャ>等ロシア民謡が入っています。ウイスキーはお帰りになってご家族、皆さんで飲んでください」と説明されました。ジョ二黒は当時のソ連では最高級品です。見るとウイスキーの入った箱は、角々が擦り切れ地肌が出て丸くなっています。ソ連の人達の間でのお礼の品物として何回も使われたのが分かります。綺麗な字で書かれた手紙は、札幌の住所が書かれた74歳のお兄さん、寺島親蔵（ちかぞう）さんへの手紙でした。お兄さんとは前々から手紙のやりとりはしているとのことでしたが、この頃は半年に1回も返事が来なくて心配されていたようです。近況と兄弟・親族の様子を知らせて欲しいとの内容でした。

私は涙が出そうになりましたが必死にこらえました。ここまで私のことを考えてくれたんだと思うと、どうして私の方から先にこの話をしなかったのかと悔やまれました。それから二人はこのような話をしたのです。「寺島さん、レコードはありがたくいただきます。また、手紙は写真を付けて間違いなく札幌のお兄さんにお送りいたします。ただウイスキーは重くて持って帰られません。」「そうですか、仕方ありませんね。このレコードを聴くときは私のことを思い出してください。」「もちろんです。寺島さん、私からはお渡しできるものは何もありません。大変失礼ですが、日本から持ってきたもの、お使いいただきたいのですが・・・カメラ、腕時計、計算機何でもいいですから言ってください。」「高島さん、ありがとうございます。電池で動いているものは、ソ連にはそうした電池がありません。いただくわけにいかないのです。」「そんなことを言わないでください。何かあるでしょう。」

このようなやり取りの後、しばらくたってから、思いつめたように、絞った声で「高島さん、今身に付けている下着を頂くわけに参りませんか？」と言われたのです。下着と言っても1年間、ソ連の洗剤で繰り返し洗濯したものです。色も多少薄黒くなっています。驚きましたが帰りの分だけ残して夏物冬物下着からYシャツ、セーターなど殆ど差し上げました。「寺島さん、ほかには無いですか？」と言いましたら、しばらく沈黙の後、控えめに「息子が釣りが非常に好きなのです。娯楽室にある日本製のリールを頂けないでしょうか？」と言われました。お安い御用ですと、持ってきたものの一度も使わなかったリールを4個差し上げました。非常に喜ばれました。なぜならソ連製は、釣り糸を1回まわすと1回だけまわるタイプなのです。

時間はアッという間に過ぎてしまいます。帰国の日が迫り、我々は嬉々としていましたが、寺島さんは口数が少なくなりどこか寂しそうでした。出発の日が来ました。寺島さんは朝早く起き、自分が出かけるのでもないのに革靴を履き、小綺麗な服装をして帰国者との簡単な挨拶が終わると、一番最初にお会いしたホテルのロビーの時のように玄関の隅っこの椅子にきちんと座って何もしゃべらないで出発を待っていました。私には、「良かった」と言ったきりあとは一言も話をしないで視線も避けているようでした。まもなくバスが来て帰国の人達ががやがやと乗り始めました。最後に私が、プロマネ、通訳の方々、魚国のコックさん、ソ連の監督官、最後が端っこにいた寺島さん、順番に一言ずつ声をかけて握手でお別れです。寺島さんとはお互いに一言も声をかけず手を握って少し長いお別れをしました。今でもその時の手の温もりが忘れられません。

バスが出発し、やれやれと思った時後ろを見るとほこりが舞い上がっている宿舎の前で寺島さん一人だけいつまでも手を振っていました。皆に見られないようにしながらこらえきれず涙を流しました。寺島さんは日本との絆が一本一本たち切られて行くような感じがして非常に寂しかったのだと思いました。

こちらに来てちょうど1年、途中一度も帰国したことはありませんでしたが、長いような短いような1年が終わりを告げました。（続く）